

●アメリカ旅日記（国務省の招待を受けて） 八二年五月

すべて初体験の県庁生活のなかで、交際範囲が圧倒的に広がったのは何物にも替えがたいプラスだった。この間、アメリカ大使館のイーマン参事官（後にコロンビア大学教授）とも知り合う。仲介者は PPTI（国際郵便電話労連）東京事務所長の初岡昌一郎さん（後に姫路独協大学教授）。おそらく二人の推薦があったからか、マンズフィールド駐日大使名でアメリカ国務省の招待を受け、一九八二年五月、「English poor」の回状をもって、東海岸から西海岸へ一ヶ月、行く先々でボランティアの助けをかりながら、アメリカ初体験の旅をした。その時のメモから判読できるものを採録する。

シアトルの入国管理官は童顔なり ハブ・ア・グッド・トリップと書いて微笑む

シアトルの「タコマの富士」を眺めつつ 未知への旅のこころ調（ととの）う

モンタナの白銀の山脈（やま） 飛びゆけば 若きマイクの働きし街

（招待状の署名者マイク・マンズフィールド大使は、若き日モンタナの鉱山で働いていた）

建国の高き理想を想いつつ マウントバーノンの丘をさまよう

「家庭崩壊ノー 家庭変容イエス」と リブの指導者静かに語る

米国の議会はかくもオープンなり 旅行者のわれを隈なく案内す

コウオールは白系ロシアの娘なり その微笑みはモナリザのごと

スーパーで豆腐 納豆買い込みて 自炊できるは良きホテルなり

反核のタウンミーティングに出てみれば 政府代表もパネラーなりき

危険だと言われし夜の黒人街 一人歩めば子らが群がる（以上 ワシントン DC）

銀行へ一緒に走るオハートニク 夫は亡命ハンガリー人なりき

（両替の時間がなくなり困っていると、ボルチモア市国際ボランティアのミセス・オハー

トニクが銀行に電話して時間外のOKをとり、一緒に走ってくれた）

肌の色と年齢層のミックスが 街の活気と市の黒人課長

米兵と日本人妻の娘キビキビと 市民運動のリーダーなりき（以上 ボルチモアで）

フィラデルフィアの駅で別れし留学生 柱のかげで目頭を拭く

ニューヨークは思いのほかの街なりき あこがれ強き街なるせいか

地下鉄の落書き激し目を凝らし このエネルギーの背後を想う

女神像カメラ向けても入らざり アメリカ民主主義もかくのごときか

国連の庭に翻る万国旗 日の丸の旗やや元氣なく見ゆ

（国連事務次長の明石康さんと面会、民際外交について意見交換）

マンハッタンのクラブサンドは美味なりき 友と静かにコーヒーすする

（読売新聞を辞めてジョージタウン大に移っていた浅井信雄さんと）

ターバンのアラブの人が道尋ぬ われは早くもアメリカ人なり（以上 ニューヨーク）

広大なリサーチパーク視察して 工業団地終われりと感ず

(リサーチトライアングルパークを見学。全米でPhDが一番多い地域とか。知識  
経済対応の産業政策、とくに「かながわサイエンスパーク」へのヒントを得た)

ノースカロライナの原生林に仰ぐ月 いまアメリカにわれは在るなり

(以上ローリー、ダーラム、チャペルヒルにて)

食前に手をとり祈る農場に アーカンサの夕陽いま落ちんとす

(アーカンサ州リトルロック市郊外のウインロック・インタナショナルの農場を見学。農場で働く東欧移民のヘレン家にホームステイ)

東欧を捨てたるヘレン アメリカにも 望み失せりと涙ぐみたり

山深きウインロックの山荘の ベッドに入ればコヨーテの声近づく

(コヨーテはアメリカ狼)

お別れに抱擁すれば激やせヘレン 広き農場の苛酷さ想う(以上、リトルロックにて)

海べりのニューオーリーズの落日は 忘れようにも忘れ難かり

(メキシコ湾に臨むフィッシュャーマンズワーフで夕食。脱皮せる蟹のフライは美味なり)

満月のニューオーリーズ一人行けば フレンチクオータは若者の渦

(ニューオーリーズにて)

灼熱の砂漠の街のフェニックス 人の造りし緑の尊さ

(街中の緑はすべて植樹、サボテンが目立つ)

忽然と母の名見ゆるアリゾナの Osome レストランに飛込みしわれ

(十歳のとき死別した母の名がそめ、みんなに Osome-san と呼ばれていた フェニックスにて)

娘よりおどけたる手紙届きし日 こころ浮き立ち「シャツを買う

UCLA に中国人学生多かりき そのひたむきに行き交う迫力

(UCLA はカリフォルニア大ロサンゼルス校のこと)

盲(めし) いくつか日本人学生の世話をする モース一家に光りあれかし

(モースさんはボランティアで日本人学生の世話をしていた。妻が日本人)

広大なスタンフォードに訪ね行き エマースン教授に久闊を叙す

(氏の公使時代、知事との会談に何度か同席した。「考えるとき森の中を歩く」が印象的)

フーバー研はロシア資料の宝庫なり ロシア革命のピラも所蔵す

桑港の夜景の美に魅されつつ アメリカとの別れに胸熱くなる

(以上、サンフランシスコ)